

2025年11月30日（日）

老球の細道 896号

## 11月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

Bリーグの仕事、坂下ミニバスのクリニック、会津バス協会のトップアスリート講習会、そしてわが孫のミニバス地区大会観戦とバスケット盛沢山。これからは青春と赤秋の往復か。

### 1・読書から

◆「人生においては、自分が何をしても後悔はないが、何かをやらなかったときには後悔する。ともあれ、やらねばならないのだ」〈カタリーナ・ビット著『メダルと恋と秘密警察』太郎次郎社〉：1988年カルガリ五輪で金メダルを獲得した旧東ドイツのフィギュアスケート選手。出身がトステインと同じドイツのケムニッツ（旧カール・マルクスシュタット市）。旧東ドイツの秘密警察に管理されながらも、負けじとスケート人生を貫いた。

◆「人は困ってはいけない。困ったと思うとそれだけ胸がふさがれ、何の思案も浮かばなくなる。困ったと思うな。人の仕出かした事態が、人の知恵で打開できぬはずがない」〈池宮彰一郎『高杉晋作・下』講談社〉：幕末の遺臣高杉晋作は有名な言葉をたくさん残している。「おもしろき こともなき世を おもしろく 住みなすものは 心なりけり」。どんなことでも思考一つで、ある程度突破できるものだろう。私もそうありたい。

### 2・新聞から

◆「他人との比較で自分のポジションを見つけようとする、自分が主役の人生を送ることができません」〈朝日〉：地位、お金などによる幸せは長続きしない。一方、他人との比較によらない幸せ、愛とか、やりがいとか、つながり、自分の成長は長続きする。

◆「好きなものはぼくたちに力を与えてくれるんです」〈朝日：折々のことば：辻邦生〉：好きなことは何でも楽しく、生命をみなぎらせる。好きこそものの上手なれ。バスケットボールを好きになったおかげで「生命のシンボル」と確かに触れ、心の支えになっている。

◆「晩年は、青春ならぬ“赤秋”という造語を好んでいた。秋を彩った紅葉は、いつか朽ちる。せめてその時が訪れるまで、残された瞬間を真っ赤に生き切ろう、と。真っ赤なままの葉が一枚、大地に帰った」〈朝日：天声人語〉：映画『雲霧仁左衛門』の仲代達矢が大好きだった。92歳で亡くなったが「赤秋」という言葉を初めて知った。身に迫る言葉である。

◆「誰にも作れないほどの凄いカレーを、ではなく、誰でも作れるカレーを、誰よりも美味しく、を目指そう」〈朝日：ひらり一言：加藤登紀子〉：タレントを集めてチームを強化することがあらゆるカテゴリーでトレンドになっているが、地産地消で普通の選手を、しこたまレベルアップすることに心血を注いでほしい。それがコーチの真骨頂である。

◆「いつ当たり前の日常がなくなるのかわからない。それはすごい怖いなと思った。毎日に感謝しながら、一生懸命生きて行きたい」〈朝日：スポーツ：佐々木朗希〉：18歳で大船渡を旅立って約6年。「令和の怪物」は野球の母国で世界一をつかんだ。東日本大震災の経験をふまえながら人生観を語っている。幸福は自然、不幸は突然。一日を精一杯生きるのみ。